

日本のリア王

ノンフィクション作家
 おおさわ ちかこ
 大沢 周子

長い年月、終末期のがん患者の思いを聴き取る作業を続けてきた。延命のための手術、抗がん剤治療を終えて、痛み、苦しみを和らげる緩和治療を受けている人びとだ。

厚生労働省発表の人口動態統計によると、死因の一位はがん、日本人の三人に一人はがんで死ぬ時代になった。

自分が遠くないある日、死んでゆくことを受容している人は、微笑みながら言う。

「治るのは希望、治らないのは絶望、というのはこの世の論理だよ。自分はいま生きていることに絶対の価値を置く世界から別の世界に移り住んだのだ」

このようにして〈幸福な最期〉を

迎える人々の一方に、老いの受難の風景が視野に入ってくる。

一人の男性の事例を報告したい。
 梶谷省吾（83歳）Ⅱ 仮名Ⅱの妻は、ある日突然、くも膜下出血で死んだ。娘夫婦がやって来て同居をすすめた。

「お父さん一人では寂しいでしょう。この家を売ってマンションを買いませんか。いっしょに住みましよう」

家を売った金を頭金にしてマンションを購入、同居生活が始まった。

楽しい団欒の季節は束の間のこと

であった。娘夫婦に気を遣い、やがて梶谷は息をひそめて暮らすようになる。

「自由に呼吸ができる、これは人間が生きてゆくうえで根源的希求です。不動産屋を当たりました。80歳を過ぎた人に部屋は貸せない、と断られた。住宅供給公社の高齢者賃貸



住宅の空室抽選を待っているところ

です。とりあえずウィークリーマンションに住んでいます。人生の終着駅近くで、日本のリア王になりました」

娘夫婦に背かれた彼は「日本のリア王」であった。シェークスピアのブリテン国のリヤ王は、嵐吹きすさぶ荒野を咆哮しつつ彷徨うが、梶谷省吾は荒野に座して目を閉じている。

怒りや憤り

からはるかに隔たつたところに、すでに彼はいる。死に堕ちてゆく途上にいる人間として、緩やかに

たどり着いた地点が「赦し」であった。「許す」と書くより「赦す」という文字のほうが彼の心情を正確に表現していると思う。

天命を知って、いい意味での諦めの境地に達している。安心立命の境地と言おうか。阿弥陀とともに、か、イエスとともにか。宗教に近くいる

のだ。

中国古典の『莊子』に次の言葉がある。「親を忘るるは易く、親をして我を忘れしむるは難し」。子どもが親を思う情よりは、親が子を思う情のほうがはるかに深い。二千年数百年前の名言は私たちにとって諫めであり、また慰めでもある。

血縁が「厄介」と感じる介護を、専門的なトレーニングを受けた介護スタッフは「厄介はスタッフにとつてはやり、甲斐です」と言いきつた。

施設入居を「かわいそうに」という世間のまなざしにも問題がある。次世代と同居が善、という思い込みにも問題がある。

一人暮らしで自立して生きている人、介護が必要になって訪問ヘルパーに助けられて平安な心で生きている人。自分の老いの日々を自分で選んでおきたい。体力と、判断力のあるうちに。

（昭和33年文学部卒。著書に『ホスピスで迎える死』など）

急ぎ足のクローニクル

多摩市長

渡辺 幸子

昭和43年4月 晴れて中央大学

法学部政治学科に入学しました。

長野県松本市から上京した私には、神田駿河台校舎は、広くはない校庭に4万人の学生がひしめくコンクリートジャングルでした。

2年から、プレゼミとして「大原ゼミ」に在籍。1年先輩には谷喬生さん（新潟大教授）がいらして、論理的に議論をすることを学びました。

サークルは、公式テニス同好会「わかもの」に所属していました。文京区の茗荷谷テニスコートをベースに、杉並区の松が谷コートにも通いました。夏休みは、山中湖で合宿。大根畑にボールを拾いに行ったものです。

政治学会にも席をおき、志津先輩が所属する佐竹ゼミに入入りする機

会をいただきました。富士山麓での合宿にもついて行きました。

2年生の4月。大学校舎にはロックアウトで入れず、新宿御苑でクラス討論会がありました。季節はずれの大雪に桜の花が凍えていた情景が忘れられません。

昭和47年、ニュータウン建設が始まったばかりの多摩市の発展性に惹かれて多摩市役所に就職しました。女性も法的には平等、大学進学時に考えた福祉の仕事ができるかもしれないと考え、地方公務員を選択しました。

昭和57年、多摩ボランティアセンターを立ち上げ、そこで、中大「青い鳥」の福祉に真面目に取り組むメンバーと出会いました。

平成5年から平成10年の5年間、多摩センターにあるパルテノン多摩の事務局長として、人事、予算、評

議員会、理事会対応など、ミニ市役所を経験することができました。

平成14年2月23日、鈴木前多摩市長が収賄罪で逮捕されました。

意外なことに、何人もの市民の方、議員の方から、市長に立候補するよう、とのお話をいただきました。3月31日夜、30年間、市職員として様々な場面でお世話になった方々に相談申し上げ、後援会の中心になっていただけることになりました。藤本哲哉法学部教授に後援会会長をお願いしました。

私は、私を支えて下さる市民の方々を中心に、お金をかけない手づくり選挙をしました。企業からの献金はいただかず、一人1万円以内の寄付と自己資金、公費補助で選挙を行いました。

選挙中、多くの中央大学OBの方々に応援していただきました。43

年卒業の小林満起子さんの地域ネットワークには目を見張りました。

平成14年4月21日 多摩市長に就任。早速、43年卒業の関根靖弘弁護士に教育委員、酒井由美子法学部助教授に都市計画審議会委員に就任いただきました。これからも、母校にお世話になります。

中央大学が事務局の「学術・文化・産業ネットワーク多摩」との連携にも、大いに期待しています。「多摩市はいい町だ」と、おっしゃっていただけると、市民がともに支え合う夢のある街の実現をめざして前進します。

(昭和47年法学部卒)



あなたの人生、自分流？

NHKエグゼクティブアナウンサー・中央大学クレセントアカデミー講師

葛西 聖司

「夫が亡くなり、死んだらお終い、自分のやりたいこと始めなきゃと思っただけです」

英語塾の講師をしていた主婦のこぼれである。始めたのはハーブ栽培。そしてそれを利用した料理や手芸の教室経営も。奈良に近い山間の洋館はハーブの香りと色に溢れていた。

こう書くと、有閑主婦の趣味となりそうだがちよつと違っている。夫と死別したあと再婚。相手はJRの運転士で、やはり離婚歴がある。思い切った第二の人生の選択は妻が自分の夢を叶える為、夫に仕事を辞めてもらったという点だ。

妻の提案に乗った夫は潔よくこういった。「以前の結婚に失敗したから、もう家庭は壊したくない。ただ

反対するのではなく、計画を熟慮して、夢に参加することにした」と。

夫唱婦随ならぬ逆転の関係。提案するのが妻、実行するのは夫。ハーブ畑の開墾、無農薬野菜の栽培、花の刈り取りすべてを夫がやる。

未完成ながら丸太の作業小屋まで手作りし、籐籠編み教室に使っている。今こうした新しい家族関係や生き

方発見をしている人

たちが多い。わたしはそんな家族を毎週、衛星第二テレビ水曜夜7時半からの「人生自分流」で取材している。

わたしも50代、同世代の人生選択を教えてもらい、真似はできないが

意気を学んだり、努力が実を結んでいる例に力づけられている。父母の介護のためUターンして夫

婦で地ビールを作っている元銀行マン。アウトドアが好きな子供のためにアパレル産業を辞め山里でパンを

焼きながら自然環境を与えた両親。

ゴルフ雑誌の編集者が漁師になって妻と半農半漁の自給生活をしているケースなどさまざまだ。

都会暮らしに疲れて退職後は田園でペンション経営を考えると考える人が多いと思うが、たいていは失敗する。それで生計を立てようとするから帳尻があわず2、3年で挫折するのだ。

成功している

人は、年収がたとえ10分の1に落ちても焦らない人たちがばかりだ。現金収入がないかわり、夫

婦や家族の絆、笑顔、汗、心地よい疲労、健康的な食生活…なんらかの充足感に満ちている。成功の秘訣は、定年になってからでは遅いと判断

45から50歳での再出発計画。そして新しい地域に溶け込む努力をし、何回か失敗、挫折を繰り返すことだ。

たとえば花作りの元商社マンは妻

になんの相談も無く退職、転居、開墾生活をスタート。こんな無謀な夫は普通なら離婚だが夫いわく――

「君はいままでどおり家事と子育てだけでいい、そして金銭的に不自由はさせない」といいきった。とはいえ、2年間妻は夫と口をきかなかった。スーツ姿から長靴、作業着で黙って働く夫にも知らん顔。開墾途中、台風で全滅。またやり直し。

そうして2年が過ぎた頃、妻は初めて整然とハウスが立ち並ぶ農園を見せられた。

そこに立ったとき「お父さんがやりたかったこと少し理解できた気がした」という。土いじりも大嫌いなにより虫を嫌がる妻がそれから協力し始めた。

人生80年90年の時代。いくらでもやり直しがきくはず。第二の人生のヒントはあなたの身体の中に隠れているのです。

(昭和49年法学部卒。著書に『名ゼリフの力』など)



学員と俳句

中央俳句会事務局長

ながめま
長沼ひろ志

学員会が、事業の一環として『学員時報』に「中央俳壇」を設け、俳句を通じて学員の学員会活動への参加を図ったのが平成五年、それに触発されて、俳句同好会「中央俳句会」が発足したのがその翌年のことである。

平成四年春、時の学員会会長堂野達也先生から、「学員会の事業に文化的なものを取り入れたらどうか」との諮問を受けた市橋千鶴子学員会副会長が、折からの俳句ブームに着目し、時報の紙面に俳句欄を設け、学員に限らず学員や学生のファミリーからの俳句を掲載することを提案した。応募俳句の選者には、当然のことながら、学員の俳人を当てることとした。

当時学員の中には、穴井太、石原八束、宇都木水晶花、加古宗也、関口謙太、鷹羽狩行、千代田葛彦、松尾隆信、湊楊一郎、和知喜八といった方々が俳人として名を連ねられていたが（日外アソシエーツ『詩歌人名事典』平成五年版）、最初に就任を依頼した石原八束さん（昭和十八年法卒）から快諾が得られ、初代の選者に就任していた

霜柱はがねのこゑをはなちけり
の句碑を建立したが、石原さんは、この句碑の完成を見ずに、同年七月十六日逝去された。東大の三四郎池にあるへ銀杏ちるまっただ中に法科あり 山口青郵と並んで、母校の庭に立つ数少ない句碑として、当時話題になったことである。



石原さんは、俳壇の重鎮、俳誌『秋』の主筆、詩人三好達治、俳人飯田蛇笏研究の第一人者として多忙を極められていた中を、「母校の依頼ということであれば」と時報の選者と俳句会の顧問就任を快くご承引くださり、俳句欄の名称も「白門」などとせず、「中央」の名を冠するよう提案されるなど、熱烈な母校愛の持ち主であられた。

学員会は、石原さんの俳人として

とところで、中央俳句会は、市橋千鶴子さん（俳号・千翔、「河」当月集同人）を会長とする、会員数約百人の、学員会とは直接の関係のない任意の俳句同好会として、月例の句会と年数回の吟行会を催しているが、会員の中には、俳誌「悠」の主宰水見壽男副会長をはじめ、各結社の主

要同人が多数含まれている。その中央俳句会は、学員会の委嘱を受けて、全学員とその家族を対象に『中央俳壇年刊合同句集』の刊行を行っており、創刊の平成十一年度は百三十人、十二年度は百七十三人、十三年度は百八十七人と、次第に出詠者が増えてきていることは、学員の中に俳句愛好者が大勢いることの証左で、頼もしい限りである。

これも特筆に値することであるが、最近、支部単位での俳句会が増えてきていることである。今年俳句会創立五十周年を迎えた南甲俱樂部支部と、古い歴史を持つ京都支部は別格として、杉並区、練馬区、文京区の三支部に俳句会が誕生している（平成十二年度『支部活動報告書』より）。これらの支部は『年刊合同句集』にも揃って出詠されており、今後支部単位の俳句会が活発化すれば、他大・学校友会に類を見ない、優れた合同句集になるものと期待される。（本名・末廣。昭和28年法学部卒）